

9. 佐藤清 骨髄性白血病ノ組織的研究.

東京醫學會雜誌 四十二年. 第二十三卷. 十八號

10. 全. 惡液質ニ於ケル膠體骨ノ所見.

東京醫學會雜誌 明治四十四年五月. 第二十五卷. 第十一號

鼠咬症ニ「サルブルサン」ヲ應用セシ一例

吉川 義 謙 述

鼠咬症ハ歐米各國ニ於テハ稀有ナル症ニシテ之レニ關スル記載少ナキガ如シ千九百年三宅(速)博士ノ之ヲ歐洲ニ報告セラレタル以來漸ク歐米人ノ知ル所トナリタリト之ニ反シ本邦ニ於テハ古來其例尠カラズ靜岡縣溝口家ニアリテハ文化文政時代ヨリ本症患者ヲ治療セシコト實ニ數千ニ及ブト云フ爾來諸家ノ實驗報告漸次増加シ就中明治四十二年中外醫事新報第六百九十四、九十五、及九十六號ニ亘リ前島淳一氏ノ精細ナル調査報告アリ其症狀豫後ニ關シテハ諸家ノ說略一致スルヲ見ルモ原因及治療法ニ至リテハ未タ確證ナキヲ遺憾トス

本症潛伏期ハ短キハ數日長キハ數年ニ及ブト云フモ多クハ約十六日ナリ今症狀ヲ概括スレバ身神違和、四肢倦怠、頭重等ノ前驅症ニ次キ發作性發熱、發熱ト同時ニ一度治療セル咬傷部紫色浸潤疼痛、逐次散發スル紫斑、淋巴管炎、淋巴腺腫、心動微弱貧血、便秘等ノ徵候ヲ呈シ重症ニアリテハ浮腫ヲ起スコトアリ豫後ハ通

常三週乃至五週ノ經過ヲ以テ治ニ就クモノ多シト雖トモ稀ニ年餘ニ亘リ貧血衰弱加ハリ斃ルルモノアリト云フ死亡率ハ三宅(速)博士ニヨレバ十%前島學士ニヨレバ七%ナリト云フ

原因ニ就テ諸家ノ檢索多ク陰性ニ終リ緒方博士ハ一種ノ原虫ヲ發見セリト云フモ未ダ確定セラレズ要スルニ今尙不明ニ屬ス然レドモ狂犬病ノ狐、猿、牛、馬、羊、山羊、豚、鹿、等ノ咬傷ニヨリ發スルガ如ク鼯及猫ノ咬傷ニヨリ本症類似ノ症狀ヲ發現スルノ事項ハ原因檢索上大ニ留意スベキモノトス

四十四年九月余ハ本症ノ一例ヲ實驗シタリ其徵候ハ左ニ略記スルガ如クニシテ發作性發熱容易ニ止マズ患者漸次衰弱ノ狀アリ之レガ治療ニ就テ大ニ苦慮考察中蒲生翼氏曰ク「サルバルサン」ハ獨リ微毒ニ効アルノミナラズ再歸熱、鶏、鶩ノ傳染病、馬ノ胸疫等ニ奏効ストノ報告アルニ由リ本症ニモ亦應用ノ價値アルベシト尙ホ廣ク諸雜誌ヲ涉獵シ之ガ治療法ヲ探求中偶々谷口(長雄)博士及片山(久壽頼)學士ノ本症ニ「サルバルサン」ヲ應用シテ奏効セシ報告(四十四年十月醫學中央雜誌第百二十號)ニ接ス即チ意ヲ強メテ直チニ患者ニ應用シタルニ奏効顯著單ニ一回ノ注射ニヨリ固有ノ發作性發熱ヲ防遏シ全治ニ至ラシメタルト一ハ血液檢査上一種ノ類圓小体ヲ發見シ多少興味アルモノト思惟シ調査ノ不備ヲ顧ミズ茲ニ報告シ識者ノ高教ヲ乞ハントス

砲兵一等卒 某

血族 父ハ不明ノ疾患ニテ斃ル母及同胞健存患者生來強壯十五歳ノ時熱性病ニテ二週日十七歳ノ時胃腸病ニテ一ヶ月醫治ヲ受ケタル外著明ノ疾患ナシ四十四年九月二十五日室内ニ居リシ鼠ヲ追窮捕ヘントシテ右小指第三節部ヲ咬マレ背面及掌面ニ二齒ノ咬傷ヲ受ケ當時出血中等ナリシモ患者鼠咬傷ノ恐ルベキヲ知リ自カラ指根部ヲ絞擠シテ出血ヲ計リ自然止血スルニ至リテ止ム爾後三日間ニシテ異狀ナク治癒セリ但シ若干

病名	曆日	十三日	十四日	十五日	十六日	十七日	十八日	十九日	二十日	二十一日	二十二日	二十三日	二十四日	二十五日	二十六日	二十七日	二十八日	二十九日	三十日	三十一日	一二月	三日	四日	五日	六日	七日	八日	九日	十日	十一日	十二日				
	病日	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49			
午前(後)		前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後		
呼吸	脈搏	180																																	
	体温	41.5																																	
尿量																																			
異重																																			
便通		0	1	0	1	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	1	0	0	1	2	1	1	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0
備考			安知必林一五分服		安知必林一五分服						安知必林一七分服				安知必林一分服	膠筋腫毒 瀉海安	安知必林一分服	切開口吸引裝置	均規五頓用																

脈體
搏溫

病名	曆日		十一日		十四日		十五日		十六日		十七日		十八日		十九日		二十日		二十一日		二十二日		
	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	
病日	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60												
午前(後)	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	
呼吸	180		170		160		150		140		130		120		110		100		90		80		
脈搏	41.5		41.0		40.0		39.5		39.0		38.5		38.0		37.5		37.0		36.5		36.0		
体温	70		70		70		70		70		70		70		70		70		70		70		
氏名	尿量																						
	異重																						
備考	便通	0	1	0	1	0	0	1	1	0	1	1											
	備考			香三問...			午前土時...																

以下十日退院時迄予省思...

脈體搏温

全身倦怠頭重アリシモ介意セズ十五日ヲ經過セリ十月十日即チ受傷後十六日目に至リ右腋窩ニ鈍痛ヲ覺エ指觸スルニ鳩卵大ノ腫物アリ此部皮膚癩癩性ニ隆起スルモ變色ナシ同時小指咬傷部浸潤腫脹少シク紫色ヲ呈ス十三日受診同日下志津衛成病院ニ入院ス經過左ノ如シ

十月十三日 入院當時體格榮養共ニ中等、輕度貧血、舌薄苔、食思不振、食後惡心、頭重、便秘ヲ訴フ其夕体温三十七度四分咬傷部及腺腫ニブロー氏液塗法ヲナス當日以後熱發作ノ狀及之ニ對スル處置ハ第一表体温表ニ記註本文中ニ省略シ其他重要徵候ノミチ左ニ掲グ

十七日 塗法持續ニヨリ腋窩腺腫減退雀卵大トナル小指咬傷部ノ浸潤ハ依然タリ

十九日 此日以後十月三十日迄體温三十八、九度ニ稽留ス此間「アンチピリン」服用ニヨリ一時的熱下降ヲ見ルモ直ニ上昇ス、時々腓腸筋部輕微ノ鈍痛ヲ訴フ、脾臟及肝臟肥大ナシ

二十七日 腺腫依然雀卵大之ニ應ジ皮膚少シク隆起スルモ變色ナシ咬傷部浸潤依然少シク紫色ヲ増ス兩局所ヲ切開ス腺腫深ク觸ルルニ化膿ナシ出血暗黑色ナリ強ク壓搾シ約二十「グラム」ヲ出ス腺腫ヲ摘出セズ小指切開口ヨリモ暗黑色血液ヲ出ス充分搾出セリ

二十九日 腺腫豌豆大ニ減小切開口ニ吸引裝置ヲ施シ暗黑色血液約二十「グラム」ヲ出ス

三十日 腋窩前側ニ當リ大胸筋ノ一部少シク浸潤癩癩性腫脹ヲ呈ス發赤波動ナキモ筋炎發現ヲ願慮シ前切開口ヲ開大シ暗黑色血液ヲ搾出ス筋組織モ亦暗黑色ヲ呈シ一部脆弱ナルヲ認ム

十一月二日 創面暗黑色ハ日々ニ減退シ鮮紅色佳良ノ肉芽面ヲ呈ス

五日 心力稍微弱心音少シク不純ナルヲ以テ「ストロファンツス」下劑一、〇ヲ處ス、臍左側右頸側ニ紫紅色不正五厘銅貨大皮膚面ヨリ少シク隆起セル硬キ斑ヲ見ル指壓ニヨリ褪色セズ、肝脾腫ナシ、「パラチフス」A及B菌凝集反應檢査陰性、昨年六月腸窒扶斯豫防接種濟、十二指腸虫卵陰性、尿暗褐色透明尿量及排尿回数數當時ト異ナラズ反應酸性、比重一〇二六、蛋白陰性

六日 腋窩腺腫全ク消散ス肉芽面良好其面狹小ス

七日 全身倦怠、頭重、食思不振等稍輕減ス

血球計算スルニ第二表末行ノ如シ、血液乾燥標本ヲ作りエーレルヒ氏三酸液リヨフレル氏ロマノスキー氏液ニテ染色スルニ白血球種類第二表末行ノ如シ、細菌原虫類陰性

八日 血色素計算六十五%、心力恢復シ「ストロファンツス」ヲ服用ヲ止ム

十二日 五日發現ノ紫斑自然消散シ何等痕跡ナシ

十五日 身心倦怠、頭重食思不振、全ク自覺セズ

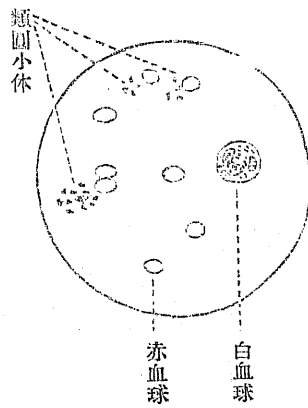
十八日 午前三十七度三分午後發作ヲ豫想セシモ「サルバルサン」注射ヲ豫定セシニ付午前十一時其量〇、四(患者十六貫三百四十匁)ヲ肩胛間

部ニ皮下注射ス午後三十七度六分同九時四十分注射部鈍痛アリ仰臥ヲ妨クルモ其他異狀ナシ

注射前午前十時前脰中央ヨリ血液ヲ採取乾燥標本ヲ作り前使用ノ三種染色液ニテ染色ス白血球種類前回ニ同シ

一視野略圖

八百倍擴大
リヨフレル氏アルカリ性メチレンアラウ染色



リヨフレル氏液及ロマノスキー氏液染色標本各二枚ニ於テ左圖ノ如ク血球外ニ一種ノ小体アリ該小体顆圓形ニシテ中央少シク絞搾シ周縁確然タラズ多核中性顆粒白血球ノ顆粒ニ比シ染色強シ標本中白血球ノ崩壊セシモノナシ

尙ホ同時血液ヲ南京鼠ニ皮下注射及「ガラチン」培養基ニ塗布ス共ニ陰性

十二月九日 十一月十八日「サルバルサン」注射後温体平温注射部モ亦異狀ナク身體爽

快、貧血漸次恢復体力増進、体重注射時ニ比シ百六十匁増加シ血液検査上赤血球四百

七十二万白血球七千六百其比一ト六百二十一血色素七十五%ニ増量ス依テ十二月十二

日全治退院

午後ニシテ入院後三十七日間ニ五回發作アリ毎回熱持續日數多クハ三日間ナルモ一回ハ十一日間不正稽留熱ヲ呈シ一回即チ「サルバルサン」注射日ノ發作ハ一日間ニシテ止ミタリ發作終結ハ常ニ分利狀ニ下降シ發汗等ナシ

血液検査中血球及血色素成績ヲ諸家報告ト比スルハ第二表ノ如シ

第二表

調査者氏名	成分		赤血球	白血球	赤白血球ノ比	白血球ノ種類
	血色素	赤血球				
原 氏	五六%	六三九万	八八〇〇	一ト七二六	多核中性顆粒多シ「エオジン」細胞及淋巴球少數	
爾 見 氏	八〇%	三八〇	七四四八	一ト五一〇	多核中性顆粒多シ	
前 島 氏	八六%	四四〇	一四〇〇〇	一ト三一四	多核中性顆粒多シ淋巴球ト相半ス大淋巴球少數	
吉 川	六九%	四五四	七八〇〇	一ト五八二	多核中性顆粒多シ「エオジン」細胞普通大小淋巴球少數	

上表ヲ比較スルニ赤血球減少白血球(多核中性顆粒)ノ増加ハ爾見前島兩氏ノ例ニ一致シ血色素減量ハ原氏ノ例ニ近似スルヲ見ル

乾燥標本中余ノ見タル一種ノ類圓小体ハ嘗テ岡本某氏ノ報告セラレタルモノニ酷似ス(氏ハ「フクシン」染色標本ニテ強ク着色スル數個群簇セル顆粒狀物質アリテ恰モ白血球ノ破潰シテ其内容ノ散乱シタルガ如キモ白血球顆粒ヨリ大ニシテ且着色ノ度強キヲ見タリト云フ)且第一回検査即チ十一月七日熱間歇時及第三回検査即チ十二月九日(「サルバルサン」注射後二十一日目)ニ採取セシ血液標本ニハ共ニ陰性ニシテ第二回検査即チ十一月十八日發作直前採取セシ標本ニ著明ニ之ヲ見タルハ一顧ノ價アルベキモノナリ

本症ニ「サルバルサン」ヲ應用セシハ余ノ寡聞未タ谷口博士片山學士ノ各二例及濫川氏ノ一例(明治四十四年十一月中外醫事新報第七百六十號)計五例ヲ識ルノミ今回余ノ實驗一例ヲ合セテ僅カ六例ニ過ギズ少數實驗ヲ以テ「サルバルサン」ノ本症ニ對スル可否ヲ斷定スルハ早計ヲ免カレズト雖現今尙ホ鼠咬症ニ一ノ據ルベキ治療法ナキノ際他ノ藥劑應用ニ比シ奏効アルヲ確信シ又片山學士報告ノ如ク本劑ハ本症ノ發熱時期ニ注射スルモ何等危懼スベキ症狀ヲ來サザルコトヲ實驗セリ

終リニ臨ミ本調査ニ當リ蒲生翼氏ノ懇篤ナル指導ト河原魁一郎氏ノ血液検査一部ヲ擔當セラレタル勞ヲ感謝ス